

Title	ラオスにおける都市型住居の形態構成に関する研究
Author(s)	Phonethip, Pathana
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44902
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	ボンティップ パタナ PHONETHIP PATHANA
博士の専攻分野の名称	博士(工学)
学位記番号	第 18750 号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科建築工学専攻
学位論文名	ラオスにおける都市型住居の形態構成に関する研究
論文審査委員	(主査) 教授 吉田 勝行 (副査) 教授 舟橋 國男 教授 柏原 士郎 助教授 阿部 浩和

論文内容の要旨

本論文は多民族国家ラオスのヴィエンチャン市に現存する集合住宅の住まい方に対する調査、及び少数民族の代表であるモン族の住まい方に対する調査を通して、ラオスにおける都市型住居計画立案の基盤を構成するとともに、その研究過程を後進育成の教育に適用することを目的としており、以下の5章から成り立っている。

第1章は序論で、本研究の目的と背景、関連する既往研究についての概要を記述し、本研究の位置付けを行っている。

第2章では、ヴィエンチャン特別市内にある集合住宅（アパート形式及び長屋形式）、特にラオス国内の先駆例としてのアパート形式住宅について、各住戸の面積規模や、室構成、平面配置、各室の広さに対する満足度、家具等の配置に見る空間利用などの調査を行い、アパート形式の集合住宅の現状を明らかにするとともに、広間の使い方などから伝統的な住まい方の継承は伺えるものの就寝方向などの住習慣に変化が生じつつあることを明らかにしている。

第3章は、多民族国家において都市型住居を計画して行く上で不可欠な少数民族の住習慣を知るための一環として、ラオスに居住する数多くの民族の中で特に“白モン族”の住居を詳細に調査し、現在の住居形態と住まい方、寸法体系などを明らかにするとともに、信仰にかかわる住習慣などについて分析を行い、“精霊の柱”が新興の住宅では意識されなくなるなど、その伝統的住まい方が変化しつつあることを見出している。

第4章では、今後のラオスにおける住宅政策を担う人材育成の場としてのラオス国立大学工学・建築学部建築学科における建築教育内容と、その成果として多数を占める住宅分野の卒業研究について分析を行い、学生の資質について検証するとともに、本研究過程の大学教育課程への導入の手がかりを提示している。

第5章は結論であり、これまでに得られた結果を整理要約し、ラオスにおける都市型住居計画の構成に関する基盤を形成する要件として取り纏め、提示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、経済開放政策によって急速な人口集中が懸念されるヴィエンチャン都心部における集合住宅とラオスに数多く居住する少数民族の住まい方の現状を分析するとともに、これからの都市型住居計画の担い手としての計画者

育成の観点から、ラオスにおける建築教育の現状を分析することで、ラオスにおける都市型住居計画立案の基盤を構成するための基礎的要件を見出そうとしている。主な成果は次の通りである。

- (1) ヴィエンチャン特別市に現存する集合住宅の現地調査より、アパート形式の平面型の平均面積は81.1 m²で、台所、便所・風呂、廊下等、居室、ベランダの平均面積は、それぞれ12.5 m²、5.6 m²、3.6 m²、47.0 m²、12.4 m²であり、台所の広さに関して不満を持っている反面、便所・風呂については約半数が現状でほぼ満足している。
- (2) 集合住宅における各住戸の広間には、応接セット、食卓、及びTV等数多くの家具が置かれるものの、中央部に家具の置かれていない空きスペースが明確に見られる。
- (3) ラオスで縁起が悪いとされることから棟に平行に就寝せず垂直に就寝する習慣について検証した結果、アパート形式の住戸では、棟に垂直に就寝する住戸が全体の45%で、長屋形式の70%に比して遵守する割合が低い。
- (4) シェンクワン県、ヴィエンチャン県の2村において、ラオスに居住する数多くの少数民族のうち“白モン族”の住居について信仰にかかわりのある精霊の扉及び精霊の柱の有無を調査した結果、精霊の扉に関しては多くの住居に見られるものの、いずれの県においても生活変化の著しい村の方で精霊の柱が大幅に減少している。
- (5) ラオス国立大学工学・建築学部建築学科の教育は設計者育成の職能教育であり、近年導入された卒業研究については住宅研究の比率が高く、分析の際、記述統計等の利用は見られるものの、大半の記述が例示と定性的な叙述で占められており、分析考察とかかわりのない提案が結論となっている例が多い。

以上より、広間の中央に空きスペースが見られる、精霊の扉を持つ住居の割合が高い等、ラオ族、白モン族共伝統的な住習慣を強く残しているように見られるものの、就寝方向についての禁忌がアパート形式の住居でくずれている、精霊の柱が生活の変化が著しい村でくずれている等は、両族共伝統的な住習慣が時代の進展と共にくずれる傾向にあり、都市型住居についてそれらに大きくとらわれることなく計画して行けばよいこと、また、そうした研究成果を得る過程での経験に基づき、国家レベルでの住宅政策を立案していく上で必要な人材を育成するためのラオス国立大学工学・建築学部建築学科における教育の展開方向が建築計画学の導入と卒業研究への適用であること等を提示しており、建築計画学、特に建築形態工学とラオスにおける建築計画学教育の発展に寄与するところ大きい。よって本論文は博士論文として価値のあるものと認める。